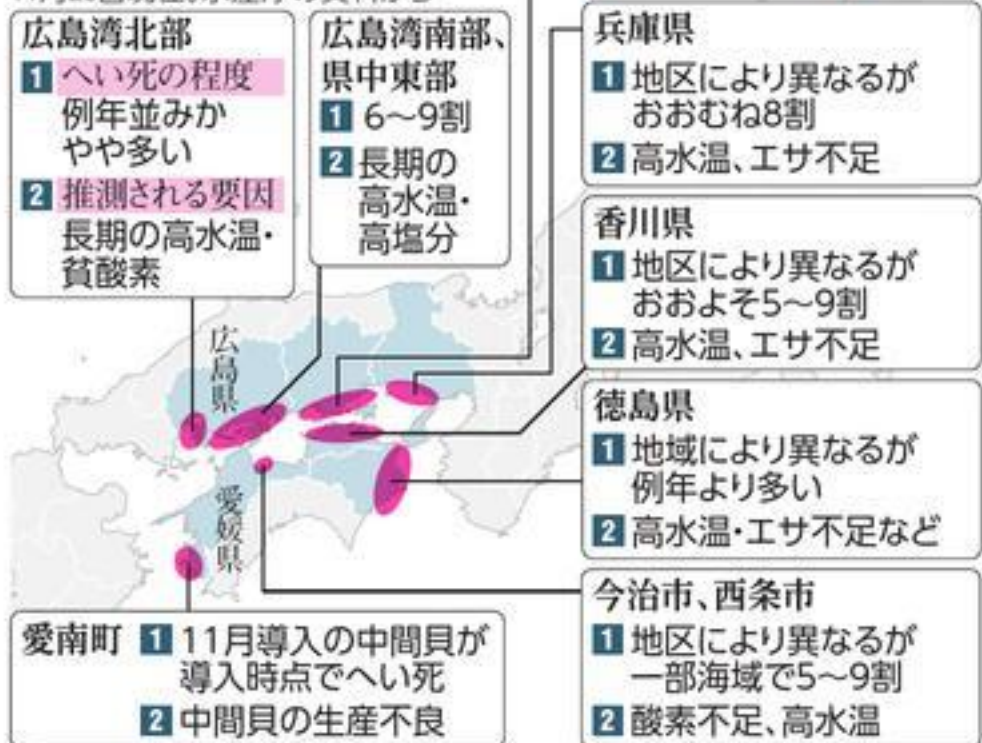


瀬戸内カキ大量死

「災害級」養殖9割死んだ海域も

養殖カキのへい死の状況

平時のへい死割合は一般に3～5割。
11月20日現在。水産庁の資料から



養殖カキの生産量の8割を占める瀬戸内海で、カキが大量死している。生産量全国トップの広島県では、水揚げしたカキの9割が死んでいた海域もあり、瀬戸内海周辺の特異な気象状況が影響した可能性がある。



口が開いて死んだカキ

「まさに災害級だ」。19日、広島県の湯崎英彦知事（当時）は、県内のカキ養殖場を視察した鈴木憲和・農林水産相との面会後、危機感を示した。

森尾水産（東広島市）は10月20日に水揚げを始めたが、9割以上のカキが死んでいた。来年水揚げするカキも厳しい状況という。森尾龍也代表（49）は「漁師を20年以上

していてこんなひどいのは経験がない」。農水省の統計によると、養殖カキ類の昨年の生産量シェアは広島63%、宮城10%、岡山10%、兵庫6%などと、瀬戸内海が8割を占める。その瀬戸内海で、カキの異変が広がっている。

水揚げしたカキが死んでいる「へい死」の割合は平年3～5割だが、水産庁が11月中旬に聞き取

ったところ、広島県中東部は6～9割にのぼり、県西部も例年並みかやや多い状況だった。岡山は水揚げ前だったが、へい死の割合は「例年より多い」、一部水揚げが始まった兵庫は「地区により異なるがおおむね8割」との回答だった。

信用調査会社の東京商工リサーチによると、広島県内でカキの養殖や販売に携わる業者60社の直近の売上高は約280億円。生産不良は県内の業者に大きな影響を与える可能性があると。昨季より出荷価格を5%ほど上げたという養殖業者は「冷凍カキがあるため、一気に高騰することはないと思うが、徐々に価格は上がるだろう」と言う。

広島県呉市は今回の事態を受け、市内の漁協に所属する55の養殖業者に一律50万円を支給することを決めた。市はふるさと納税の返礼品として生ガキを用意していたが、受け付けを停止した。市の担当者は「特産品がここまで打撃を受けると、地域経済や観光にも深刻な影響が出る」と話す。

9月に県中部の海中を調べたところ、酸素の濃度が薄くなる境目の「躍層」が、平年は水深7メートルのところにあるが、水面近くまで上がっていたという。山本名誉教授は「瀬戸内海は水深が浅く、風の影響を受けやすい。高水温や高塩分よりも、酸素不足が大きな影響を及ぼしている可能性がある」と指摘する。

一方、東北・三陸沖のカキに目立った異状は確認されていない。過去2年はへい死が多く、例年の半分ほどに収量が落ちたが、宮城県の担当者は「今年は高水温の時期が短かったせいだ、大きな変化はない」と言う。（山中由睦、相川智）

水温か 塩分か 酸欠か

養殖カキの大量死は、なぜ起きているのか。広島県水産課の担当者

は「高水温と高塩分の海水環境にさらされたカキが、生理障害を引き起こした」とみている。

今夏の県沿岸の平均海水温は、1991～2020年の平均値より1.5～2度ほど高かった。

中国地方は今夏、統計史上最速の梅雨明けで雨量が少なかった。担当者は「海水の塩分が高くな

り、カキが脱水症状のような状態になった可能性もある」と話す。

広島大の山本民次名誉教授（海洋環境生態学）は、海中の酸素濃度の変化に注目している。

県中東部の沿岸部では9月以降、北風が集中して吹き続け、表層の海水が一気に南側の沖合へと

流れ出た。そのため、酸素の少ない海底の水が表層近くにまで押し上げられ、カキが酸素不足に陥ったと推測する。

海水温が上がると、カキは産卵・放精の回数が増え、疲弊しやすくなる。ただ今夏は、高水温に強く、産卵しないように品種改良した県産カキでも、へい死が目立った。

県中東部の沿岸部では9月以降、北風が集中して吹き続け、表層の海水が一気に南側の沖合へと

流れ出た。そのため、酸素の少ない海底の水が表層近くにまで押し上げられ、カキが酸素不足に陥ったと推測する。

9月に県中部の海中を調べたところ、酸素の濃度が薄くなる境目の「躍層」が、平年は水深7メートルのところにあるが、水面近くまで上がっていたという。山本名誉教授は「瀬戸内海は水深が浅く、風の影響を受けやすい。高水温や高塩分よりも、酸素不足が大きな影響を及ぼしている可能性がある」と指摘する。